別紙1

令和5年度　学習分析事業　改善計画　三原市立本郷西小学校

１．本年度の結果

①学力定着分析　NRT　偏差値平均(全国平均を50とする)

		2年	3年	4年	5年	6年	全体
国語	前年度結果 偏差値平均		50.4	47.3	51.6	51.6	49.4
	本年度結果 偏差値平均	52.0	50.3	45.5	47.9	46.3	48.4
算数	前年度結果 偏差値平均		49.8	45.5	53.5	49.5	49.8
	本年度結果 偏差値平均	51.9	54.9	51.2	47.3	52.2	51.7
理科	前年度結果 偏差値平均				51.3	49.5	48.6
	本年度結果 偏差値平均			42.9	46.3	45.8	45.2
全体	前年度結果 偏差値平均		50.1	46.4	52.1	50.2	49.3
	本年度結果 偏差値平均	52.0	52.6	46.6	47.2	48.1	49.2

②全国学力・学習状況調査　正答率平均(第6学年対象)

教科	国語	算数
前年度結果 （対県比）	62 (93)	59 (92)
本年度結果 （対県比）	65 (94)	57 (89)

２．調査から明らかになった課題

【年度当初の学力について】(〇ことばのたつじん●かんがえるたつじん◎NRTをうけて)
〇向かい合ったときの左右、先・手前などの指す意味の理解が低い。(43、33、18%)空間認識力に課題があると考えられる。
〇たてに「裂く」ということばを知らない。(35%)語彙の少なさを表し、表現の乏しさにつながっていると考えられる。
●数直線上に分数や小数を表すことができていない(41%)ことから、数の連続性や分数・小数の意味の理解が低いことが考えられる。
●2つの事物を関係づけることができていない(25%)ことから、知識が結びついていないことが考えられる。
◎情報を選び構成を考えて話す（4年14.5%、6年29.0%）考えや感想をもって伝えあう(2年39%、5年13.8%）ことの正答率が低いことから、論理的に思考し、表現することに課題があると考えられる。
◎表と棒グラフ（49.7%）、ともなって変わる二つの数量（51.8%）の正答率が低いこと、全体的に知識・技能よりも思考・判断・表現の正答率が低いこと、この2点から思考力・表現力に課題があると考えられる。

【年度当初の学力について】(全国学力・学習状況調査をうけて)
・言葉や文章を抜き出す問題は正答率が高いことから、テキストから情報を抜き出すことはできる。
・資料がたくさんある問題、ページを行ったり来たりしながら読む問題の正答率が低いことから、量の多さや手順の多さに左右される傾向があると考えられる。
・敬語の問題の正答率が低い、つまり、普段使わない言葉・なじみのない言葉に引っかかっており、語彙力に課題があると考えられる。
・今までに見たことのない形式の表や問題文が一度読んだだけでは難しいものの正答率が低いことから、非テキストからの情報抽出、読解力等に課題があると考えられる。

３．課題解決に向けた学校組織全体の重点目標・取組

重点目標　（何を、どの程度達成するか）	達成のための具体的取組　（どのようにして）	スケジュール	検証の指標・目標
【授業改善を通した学力・学習意欲の向上】 〇論理的思考力の向上を意識した授業改善を行う。 〇「なぜ」「どうして」を児童から引き出す「問いの設定」を意識した授業を実施する。 〇課題の見られた領域や単元では、ドリルタイム・家庭学習等で基礎問題・適用題に重点的にとりくむ。	①分析をもとに、具体的な授業改善の内容を共有する。 ②「考える」ことについての理論研修を行う。 ③どのような考え方を使うのかを明らかにした授業を展開する。 ④まとめやふりかえり場面で、適切な表現での文章で表せるよう、指導する。（1）構造的な板書、キーワードが見える板書（2）視点を決めたふりかえり ⑤筋道の通った（順が明確、結論先行型）発表の仕方を指導する。 ⑥図、文章、式を関係づける指導を行う。 ⑦課題発見・解決を行う授業研究を通して、授業改善を図る。 ⑧のびのびタイム等を活用し、基本的な内容の定着や不得意領域の練習を行う。	①5月 ②7月 ③6月～2月 ④6月～2月 ⑤6月～2月 ⑥6月～2月 ⑦5月～2月 ⑧6月～3月	・QU2回目の学習意欲の数値（全学級で全国得点以上） ・各学期の単元末テスト平均値（全学級知識・技能85%以上、思考・判断・表現70%以上） ・次年度NRTにおいて人数ピークを高得点側に10ポイント寄せる（全学級）
【学級・学習集団づくり】 〇「学び合い」「ペア・グループ学習」を取り入れた授業を実施する。 〇学級活動・委員会活動・行事等で、児童一人ひとりに役割のある内容になるよう工夫する。 〇全学級が、暮会で児童の様子を共有する。	①QUの分析による実態把握を行い、各学年の集団の特性を理解するともに、特性に合った改善計画を立案・共有する。 ②QUや学力テスト等をもとに、重点的に指導すべき児童を全職員で共有する。 ③全職員が授業や委員会活動、縦割り掃除、行事など、さまざまな場で集団や個の特性に合わせた指導を行う。 ④暮会において、重点児童の経過報告と今後の対応の共有をする。 ⑤全職員が、重点児童とその対応について、情報を引継ぎ、共有する。	①7月 ②7月 ③7月～2月 ④学期に数回 ⑤4月	・QU2回目の一次支援の数値向上

４．課題解決に向けた重点取組を振り返って

【今年度の成果と次年度にむけた改善点】
〇帯タイムにおいて基礎の問題や思考スキル、思考ツールなどの学習を系統立てて行ったことで，知識・技能では，校内目標点（85点）を達成し，平均点も国語科・理科では1学期より向上させることができた。
〇日常的な児童の情報や支援方法の共有，授業中の学び合いを行ったことで，学級集団の質を向上させることができた。
●思考・判断・表現では、算数科において校内目標値（75点）を達成することができなかった。また、平均点も1学期より向上できなかった。
●引き続き，主体的な学びを促す「問い」を位置づけた授業改善と帯タイムでの学力向上の取組，低学力層の児童への支援が必要である。

５．次年度学力調査の目標値

学力定着分析　NRT　偏差値平均

		新2年	新3年	新4年	新5年	新6年	全体
国語	目標値 偏差値平均	50	52	50	48	50	50
算数	目標値 偏差値平均	50	52	52	52	50	51
理科	目標値 偏差値平均			50	48	49	49
全体	目標値 偏差値平均	50	52	50	49	49	50

全国学力・学習状況調査　正答率平均

教科	国語	算数
目標値 （対県比）	67 (97)	60 (94)